

黄帝三部鍼灸甲乙經序

晉玄晏先生皇甫謐

夫醫道所興其來久矣。上古神農始嘗草木、而知百藥。黃帝咨訪岐伯伯高少俞之徒、內考五藏六府、外綜經絡血氣色候、參之天地、驗之人物、本性命、窮神極變、而鍼道生焉。其論至妙。雷公受業、傳之於後。伊尹以亞聖之才、撰用神農本艸、以爲湯液。中古名醫有俞跗、醫緩、扁鵲、秦有醫和、漢有倉公。其論皆經理識本、非徒診病而已。

【意訳】そもそも医道が興つてからの道程は大変長い。上古の時代に神農が始めて草木を嘗めて百薬を知った。黄帝は岐伯や伯高・少俞等に諮って、人体内部については五藏六府を考え、外部では経絡や血気・色候についての総合的な判断を示し、それを天地の変動に關連づけ、人の治療で驗しつつ、生命の本源に基づき、五神の働きを窮め、変化を極めて、鍼道は生じた。その論たるや至妙のものである。それを雷公が伝授され、後世に伝えた。伊尹は聖人に次ぐ才を以て、『神農本草経』を運用して、『湯液（経方）』を著わした。中古の時代の名医としては、俞跗、医緩、扁鵲がいて、秦には医和がいて、漢には倉公がいた。それらの論は皆（医の）原理を經めていて、医の根本を理解しており、ただ病を診るだけのものでは無かった。

注①伊尹・普段から食物に接しているため、食物の病気を治す効果を熟知しており、民間の食物を用いた疾病治療と薬物の治療をまとめた。

（ウイキペディア）より…伝説によれば、伊尹の母は大洪水に巻き込まれ桑の太木と化し、その幹から伊尹が生まれたという。そこから伊尹は洪水神であると見る説が存在する。

成人後は料理人として或る貴族に仕え、主人の娘が商の君主・子履（後の成湯、湯王）に嫁ぐ際に、その付き人として子履に仕える。そこでその才能を子履に認められ、商の国政に参与し重きを成すにいたる。商が夏を滅ぼす際にも活躍し、商（殷）王朝成立に大きな役割を果たし、伊尹は阿衡（あこう）として湯王を補佐し、数百年続く商王朝の基礎を固めた。

注②『神農本草経』…伝説では、神農氏が撰者。

注③湯液…『漢書』藝文志「湯液經法三十二卷」。

注④俞跗…「俞跗」とも。黄帝の臣。湯薬を用いず、外科手術で治療した。

注⑤医緩（醫緩）…『春秋左氏傳』成公十年（BC581）…晋景公疾病。求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。未至。公夢疾爲一豎子曰「彼良醫也。懼傷我。焉逃之」。其一曰「居之上、膏之下、若我何」。醫至曰「疾不可爲也。在膏之上、攻之不可達、及、藥不至焉。不可爲也」。公曰「良醫也」。厚爲之禮而歸之。

【意訳】晋の景公は病気が重くなり、医を秦に求めた。秦伯は医者の緩に命じて病気を治療させることにした。まだ到着しないうちに、景公の夢の中で、病気が二人の幼児となつて、「彼は名医である。我を退治してしまうことが心配だ。どこに逃れようか。」と言つ

た。そのうちの一人が、「盲の上、膏の下のあたりにいたならば、我々をどうしようもすることはできない。」と言った。医者がやってきて、「この病気はお治しすることはできません。盲の上、膏の下のあたりにありますので、これを治療することは不可能であります。針を打とうにも届かず、薬も届きません。どうにも治療の方法がございません。」と言った。景公は、「名医である。」と言った。手厚く礼物を贈って帰らせた。（病、膏盲に入る」の故事。）

注⑥医和（醫和）…『春秋左氏傳』昭公元年…晉侯求_ニ醫_ヲ於_ニ秦_ニ。秦伯使_ニ醫和_ヲ視_セ之_ヲ。曰_ク「疾不_レ可_レ爲_ス也。是謂_ニ近_ニ女室_ニ。疾如_{シト}蠱_ノ。非_ス鬼_ニ非_ス食_ニ。惑_{ヒテ}以_テ喪_レ志_ヲ。良臣將_ニ死_{セト}、天命不_レ祐_ト」。公曰_ク「女不_レ可_レ近_{ケル}乎_ト」。對_{ヘテ}曰_ク「節_レ之_ヲ。先王_ノ之樂、所_ニ以_テ節_ス百_ニ事_ヲ也。故_ニ有_ニ五_ノ節_、遲速本末以_テ相_レ及_ビ、中聲以_テ降_リ、五降_ノ之後、不容_レ彈_ヲ矣。於_ニ是_ニ有_ニ煩_{手淫聲}、悒_悒（悒は過ぎる、埋はふさぐ）心耳_ヲ、乃_チ忘_レ平和_ヲ、君子弗_レ聽_カ也。物亦如_レ之_ノ。至_{ラハ}於_ニ煩_ニ、乃_チ舍_{ツル}也。無_シ以_テ生_ス疾_ヲ。君子_ノ之近_ニ琴瑟_ニ、以_テ儀節_{ナレハ}也。非_ニ以_テ悒_ス心_ヲ也。天_ニ有_ニ六_ノ氣_、降_{リテ}生_ニ五_ノ味_ヲ、發_爲五_ノ色_ヲ、徵_爲五_ノ聲_ヲ、淫_生六_ノ疾_ヲ。六_ノ氣_曰陰_、陽_、風_、雨_、晦_、明_也。分_爲四_ノ時_ト、序_爲五_ノ節_ト、過_レ則_レ爲_レ菑_{。陰淫}寒_疾、陽淫_熱疾_、風淫_末疾_、雨淫_腹疾_、晦淫_惑疾_、明淫_心疾_{。女}陽_物而_レ晦_時淫_則生_ニ内_熱惑_蠱之_疾。今君不_レ節_不時_、能_ク無_レ及_レ此_乎。

【意訳】『春秋左氏傳』昭公元年…晉侯は医者を秦に求めた。秦伯（景公）が医和を派して診察させると医和は言った。「この病気は治せません。これは（女人を近づけ過ぎて、疾蠱惑の如し）というもの。鬼神の祟りや飲食のせいではありません。女色に惑って意志を喪失されたのです。良臣が近いうちに死んで、天は祐けて下さらぬでしょう」。公が「女人は近づけたらいけないのか」と言うと、こう答えた。「節制することです。先王の音楽は、万事を節制するお手本です。五声の節奏があり、遅速・本末まじり合い、やがて中和に達したあとは消えて行き、消えての後は、二度と奏ではいたしません。この時、（ふたたび）煩瑣な技法で心を蕩し耳を聾する樂奏を行えば、（せつかくの）中和を乱すので、君子は耳を傾けませぬ。他の万事も音楽と同様。過度に及べばそこで停止し、よって疾の生ぜぬようにすべきもの。君子が女人を近づけるのは、礼節を示すためで、心を蕩すためではありません。天に六氣あり、地に降っては五味を生じ、色は五色に発し、音は五声に現れるが、（五味・五音・五声が）度を超せば六疾が生じます。天の六氣とは、陰・陽・風・雨・晦・明のこと。一年は四季に分かれ、順序には五声の節奏があるが、これが過ぎると災禍が起こります。陰が度を超せば寒疾、陽が度を超せば熱疾、風が度を超せば四肢の疾、雨が度を超せば腹疾、晦が度を超せば惑疾、明が度を超せば心疾を生じます。女人は（男に従うものゆえ）陽に属し、（同衾は）晦の時に行うもの（その陽・晦が）度を超せば、内熱・惑蠱の疾が生じます。しかるに今君は節制せず、時を守られぬのでこうならずには済まぬのです。」（『春秋左氏傳』小倉芳彦訳・岩波文庫）

漢_ニ有_ニ華_佗、張_仲景_{。其他}奇_方異_治、施_レ世_者多_シ。亦_不能_ハ盡_ク記_ス其_ノ本_末。若_キ知_直祭_酒劉_季琰_{、病}發_ニ於_ニ畏_惡、治_レ之_而瘥_{。云}後_九年_、季_琰病_應レ_發、發_當有_レ感_{、仍}本_ニ於_ニ畏_惡、病_動必_死。終_ニ如_シ其_ノ言_ノ。

【意識】漢代には華佗と張仲景もいた。華佗（原文の「其他」は「華佗」の字形の誤りとする説あり）の不思議な素晴らしい治療は、世の多くの人に施されたが、それらを全部初めから終わりまで記述することはできない。例えば知直祭酒の劉季琰が悪感情が畏悪の病（感情の起伏のはげしい精神不安定症状をいうか）を発症したとき、これを治療して治してしまった。そして「九年後、季琰はきつとまた発病するだろう。原因はやはり畏悪によるもので、病が発動したら必ず死に至るだろう」と云ったが、遂にその通りになってしまった。

注①知直祭酒…祭酒（職官名、博士）の長。

仲景見^ニ侍中王仲宣^ニ、時^ニ年二十餘。謂^ク曰、君有^リ病、四十^ニ當^ニ眉落^ツ。眉落^ツレハ半年^ニ而死^{セン}。令^①レ^ハ服^ニ五石湯^ヲ可^シ免^②。仲宣嫌^ニ其言^ヲ忤^レ、受^クル湯^ヲ勿^シ服^ス。居^ス三日、見^ユ仲宣^ニ、謂^ク曰、服^セ湯^ヲ否^ヤ。仲宣曰、已^ニ服^{セリ}。仲景曰、色候固^{ヨリ}非^ス服^ス湯^ノ之^レ疹^ニ。君何^ソ輕^ク命^ヲ也。仲宣猶^モ不^レ言^フ。後二十年^ニ、果^シ眉落^ツ。後一百八十七日^ニ而死^ス。終^ニ如其言^ノ。此^ニ二事[、]雖^モ扁鵲倉公^ト、無^キ以^テ加^ス也。華佗性惡^ク、矜^ヒ技^ヲ、終^ニ以^テ戮^ク死^シセラル。仲景論^シ、廣^メ伊尹^ノ湯液^ヲ、爲^シ數十卷^一、用^キ之^ヲ多^ク驗^{アリ}。近代^ノ太醫令王叔和[、]撰^ニ次^シ仲景^ノ選論^甚精^{ナル}、指事^{施用}。注①令…「今」の誤りか？「令」のままだと「五石湯を服用させれば、病を免れることができる」と読まざるを得ない。解決策としては「令」を「今」の誤字とする。そうすれば「いま、薬を飲めば……」となる。

注②免…宋・程迥が一七六年に撰した『醫經正本書』は「免」を「愈」に作る。

注③言…一本及び『醫經正本書』では「言」を「信」に作る。「信ぜず」。

注④七…『醫經正本書』に「七」字なし。半年としては、「七」がない方がよい。

注⑤加…『大漢和辭典』の訓は「加ゆ」。『漢辞海』では「加う」と読んで意味は「しのぐ・凌駕する」とする。

注⑥指事…明抄本「皆事」。『醫經正本書』と『傷寒論』林億序「皆可」。『醫經正本書』によれば「皆施用す可し」。

【意識】張仲景が侍中の王仲宣に会ったのは、王仲宣が二十才位のとときであった。そして彼に「あなたには病気が有り、四十才で眉が落ちるでしょう。眉が落ちたらその後半年で死んでしまうでしょう」と言った。今五石湯を服用すれば助かるでしょう」と言った。仲宣は面倒なので、薬湯を受け取ったが服用しなかった。三日後、仲宣に会って「服用しましたか」と問うと、仲宣は「した」と答えた。しかし仲景は「あなたの色を候うと全く服用していないものだ。どうして命を粗末にするのですか」と言った。仲宣はそれでも信じなかった。二十年後、果して眉が落ち、百八十七日後に死んでしまった。遂に言った通りになってしまったのである。

この二つの証例は、扁鵲や倉公でさえも、凌駕できないものである。しかし華佗は性格が悪く、技を誇り、遂に刑死を受けることになってしまった。一方仲景は伊尹の『湯液（経法）』を論述拡充して、数十巻をつくった。これを用いて沢山の病を治した。近代の太医令王叔和は、張仲景の遺した論で非常に精妙なものを選んで編輯し、みな臨床に用いることができるようにした。

注①侍中…官職名。乗り物・服飾などを担当するが、皇帝の側に仕えているため、政治に

も参与する。皇帝の信任の厚い重臣。

注②王仲宣…王粲。仲宣は字。一七七〜二一七年。後漢末から三国時代、魏のひと。著名な文学家で、「建安七子」のひとり。また『太平御覽』方術部の引ける「何顛別傳」には「王仲宣十七、嘗遇仲景」とある。

注③五石湯…五石散の湯剂。五石散は、寒食散、唐代では乳石散という。石鍾乳・紫石英・白石英・石硫黄・赤石脂の五味の石薬から合成される。「寒食散」という名は、この薬を服用後、冷たいものを食べて熱を発散する必要があったため。

注④王叔和…汪熙。叔和は字。魏晋時代、高平のひと。

按^{スルニ}、七略・藝文志^ニ黄帝内經十八卷^ト。今有^リ三鍼經九卷素問九卷二十九卷^一、即^チ内經也。亦有^リ所忘^①、失^{スル}。其論遐遠^{ナリ}。然^{レトモ}稱述多^ク、而切^{ベナルコト}事少^{ナク}、有^②レ不^{ルコト}編次^セ。比^③按^{スルニ}倉公傳^ヲ、其學皆出^テ于^レ是。素問論^{スルコト}病精微^ニ、九卷^ハ原^④本^{ツク}經脉^ニ。其義深奥^ニ、不^レ易^{カラ}覺^⑤也。又有^④明堂孔穴鍼灸治要^一、皆黄帝岐伯選事^也。三部同^レ歸^⑥、文多^ク重複^ニ、錯互^{スルコト}非^⑦一^{ツニ}。注①忘…『醫經正本書』「忘」を「亡」に作る。また通ず。

注②有…『醫經正本書』「有」を「又」に作る。

注③覺…『醫經正本書』作「覽」。『難經集注』序「按黄帝有内經二帙、帙各九卷、而其義幽蹟、殆難窮覽」

注④有明堂孔穴鍼灸治要…句読に三説あり。一『明堂』有り。孔穴と鍼灸の治要なり。『明堂』『黄帝明堂經』。谷田伸治の説。黃龍祥も支持する。／＼『明堂孔穴』有り。鍼灸の治要なり。最近では浦山久嗣がと見える。古代の図書目録にその名がみえる。／＼『明堂孔穴鍼灸治要』有り。中国の定説。ただし、こういう名称の本は古代の図書目録になし。

注⑤選事…『醫經正本書』「選事」を「遺事」に作る。

注⑥歸…おもむくところ。

【意訳】按ずるに『七略』と『漢書』芸文志^②に『黄帝内經十八卷』が記載されている。今の『鍼經』九卷と『素問』九卷を合わせた十八卷が、この『内經』である。やはり失われた篇章もある。編纂されていない所もあるその論はとても広い（深遠である）。しかし述べられていることは多いけれども、臨床に切要なことは少なく、また編輯整理ができていないところもある。『倉公伝』（の内容）検討してみると、その内容は『素問』（『内經』）から出ている。『素問』は病理を精細に論じている。『九卷』は経脈に基づいている。その内容は奥深く（理解するのは）簡単ではない。また『明堂經』には経穴と鍼灸の治要があるが、皆黄帝と岐伯が選事したものである。この三部は趣旨が同じで、文章の重複が多く、錯綜している部分は一箇所に止まらない。

注①七略…前漢の劉歆がその父劉向が著した『別録』をもとに撰したもので、中国目録学書の祖。輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方技略の七卷に分かれる。

注②芸文志…藝文志。『漢書』藝文志。『漢書』の十志の一。班固が劉歆の撰した『七略』にもとづいて選定した。六藝、諸子、詩賦、兵書、術數、方技（方伎）の六略に分かれる。

甘露中、吾病^ミ風^ヲ、加^{ヘテ}苦^{シム}。百日^ノ方治^ハ要^{スルニ}皆淺近^{タリ}。乃^チ撰^シ集^ス三部^ヲ。使^メ事類^ヲ相從^一、刪^リ其^ノ浮辭^ヲ、除^キ其^ノ重複^ヲ、論^ズ其^ノ精要^ヲ、至^{ルニ}爲^ス二十二卷^一。

易曰、「觀^テ其^ノ所^ニ聚^マル、而天地^ノ之情事^{（易作ル事可ニ）}見^ハル矣^ト。况^{シヤ}物理^ヲ乎[。]事類相從^{フトハ}、聚^{ムル}之義也。夫受^ケ先人之體^ヲ、有^ニ八尺之軀^一、而^モ不^レ知^ラ醫事^ヲ、此^レ所謂遊魂^{ナル}耳。若不^レ精^ニ通^セ於醫道^ニ、雖^モ有^ニ忠孝之心、仁慈之性、君父危困、赤子塗^マ地^ニ、無^ニ以^テ濟^フ之^ヲ。此^レ固^ク聖賢^ノ所^ニ以^テ精^ニ思^ハ極^メ論^ヲ盡^ス其^ノ理^一也。由^リ此^ノ言^ハ之^ヲ、焉^ク可^ク忽^セ乎[。]其^ノ本論^ト其^ノ文^ニ有^リ理^レ、雖^モ不^ト切^ニ於近事^ニ、不^ニ甚^ク刪^ラ也。若^シ必^ニ精要^ヲ、後^ニ其^ノ閒暇^一、當^ニ撰^シ以^テ爲^ル教經^一云爾[。]

注①其本論…「其本有論」と「有」字が抜けているという説。／この三字が衍文だという説。／「論」は「倫」に通じ、順序の意味であるという説。「其の本に倫あり…」。／「本」は三部の書。

注②後…一本作「俟」。を俟って。

【意訳】甘露年間には私は風病を病み、加えて耳も聞こえなくなり、百日間の治療は、要するに皆表面的で無内容なものであった。そこで私はこの三部を撰集することにした。事類を分類し、虚飾の言葉を削り、重複を除き、医道の要を論じて、十二巻を為すに至った。

『易経』（『周易』下経（萃卦）〔岩波下九三頁〕）に曰く、「其の聚まる所を觀て、天地の情事見わたる（『易経』は「天地の情を見る可し」に作る）」（「天地万物の集まるところを觀察すれば、天地の間の情理も知ることができると。まして物の道理に於いてはなおさらであるから、「事類相從う（内容に従い分類配列する）」とは、『易』がいうところの）聚めるという意味である。そもそも（今は亡き）父母から身体を受け、八尺のがたいが有っても、医事を知らなければ、これは所謂遊魂^②でしかない。もし医道に精通しなければ、忠孝や仁慈の心が有っても、君主や父母の危困（危ういことと苦しいこと）や、人民大衆の塗炭の苦しみを救うことはできない。これが本当の聖賢が医道に思いを凝らし、論を極めて理を尽くした所である。こうしたことから言えば、どうして医道を忽せにできようか。その元来の論と文章とに道理が有れば、今に關連が薄くとも、極端に削ることはしなかった。もしさらに詳しいことが必要とあれば、後に暇を見つけて、編輯考訂して、教科書を作成する。

注①甘露…三国時代、魏の高貴郷公曹髦（廢帝）の元号。二五六～二六〇年。

注②遊魂…『易経』繫辭上…「精氣爲^レ物、遊魂爲^レ變^ヲ。」肉体を遊離して、よりしるを持たない靈魂。あてどもなくさまよえる靈魂。浮遊靈。生ける屍。『傷寒論』張仲景序…「而進^シ不能^ニ愛^シ人^ヲ知^ル人^ヲ、退^キ不能^ニ愛^シ身^ヲ知^ル己^ヲ。遇^ヒ災^ニ値^ヒ禍^ニ、身^ハ居^リ厄^ニ地^ニ、蒙蒙昧昧、惛^ト若^シ遊魂^ノ。哀^シ乎[。]」